

J.S.バッハ：無伴奏チェロ組曲

J.S.バッハの《無伴奏チェロ組曲》(全 6 曲)が書かれた年代は、ケーテン宮廷楽長時代(1717-23)の前期と推定されている。各組曲は「アルマンド／クーラント／サラバンド／ジグ」の 4 つの舞曲を基本としながら、第 1 曲に「プレリュード(前奏曲)」を、ジグの前の第 5 曲に「メヌエット／ガヴョット／ブーレ」のいずれかの流行舞曲を置く構成になっている。

無伴奏チェロ組曲 第 3 番

第 1 曲プレリュードは、16 分音符が淀みなく流れるスケールの大きな音楽。第 2 曲は、軽やかな愛らしさを感じさせるアルマンド。第 3 曲は、音階的な分散和音とスラーで奏されるイタリア型クーラント。第 4 曲は、典型的なサラバンドのリズムに旋律が勝っていく瞬間が美しい。第 5 曲ブーレは、演奏会用の小品として奏される機会も多い。第 6 曲は、終曲にふさわしい堂々としたジグ。

無伴奏チェロ組曲 第 2 番

ニ短調という調性は、音楽を内省的な方向へ導く。第 1 曲プレリュードは、和声よりも旋律そのものに重点が置かれている。第 2 曲は高度な技巧が要求されるアルマンド、第 3 曲のシンプルなイタリア型クーラントを経て、第 4 曲は引き伸ばされた旋律に和音が重なり、憂愁を湛えたような横顔を見せるサラバンド。第 5 曲の 2 つのメヌエットでは、主調の第 1 メヌエットがニ短調、第 2 メヌエットがニ長調となり、古風な響きを醸す。第 6 曲のフランス風ジグは、規則正しい 8 小節の楽節構成による。

無伴奏チェロ組曲 第 6 番

本来は(高音側に E 線が追加された)5 弦チェロのために書かれており、通常のチェロでは演奏困難とされるが、技巧的にも内容的にもスケールが大きく、充実した作品。第 1 曲は、2 本の弦にまたがって同音高を弾くなど、弦楽器ならではの技巧が凝らされた難度の高いプレリュード。第 2 曲は、美しい陽光が射し込むような抒情的なアルマンド。第 3 曲は、軽やかさが心地よいイタリア型クーラント。第 4 曲のサラバンドは、重音の合間を縫うように紡ぎ出される旋律が美しい。第 5 曲は、素朴な舞曲的雰囲気を持つガヴョット。第 6 曲ジグは、様々な音型が見事に組み合わせられ、「無伴奏組曲」のフィナーレを飾る。